

児童における再生順序と気分の効果の関連

富山 尚子

(お茶の水女子大学人間文化研究科)

近年では、気分の効果の中でも、特にネガティブな気分での気分不一致効果が注目されてきている。しかし、気分不一致効果のおこるメカニズムについては依然として不明瞭な点が多い。例えば、効果の見られる時点については、最初から気分不一致効果が見られたとする研究もあれば、最初は一致効果が見られるが次第に不一致効果が見られるようになるとする研究もある。そこで本研究では、児童における学習、再生実験の中で、順番に再生された内容がどのように気分の影響を受けているのかについて詳細に分析し、再生時点と気分の効果の関連についての検討を行った。

【方法】

<被験者>小学校3年生180名。<気分の操作>ビデオによる操作によってHappy群、Sad群、Control群(ビデオ操作なし)に分ける。<記憶材料>他者(まあちゃん、ゆうちゃん)を主語とする16文(ポジティブ文8/ネガティブ文8)。各々8文の合計で27個のポジティブ(ネガティブ)単語を含む(使用する単語は、予備実験で選択)。<手続き>(1)ビデオによる気分の操作後、気分を尋ねる(5段階尺度)(2)記憶材料を学習させる(3)手がかり(まあちゃん、ゆうちゃん)を与えて再生させる。

【結果と考察】

<分析対象>平均値から±SDの範囲(11~23)の再生を行った被験者107名を分析対象とした。

<気分の効果>気分の評定値について、1要因の分散分析を行った結果、気分の効果は有意であった($p<.0001$)。従って今回の気分の操作は適切であったと考えられる。

<前半の再生と後半の再生についての分析>各被験

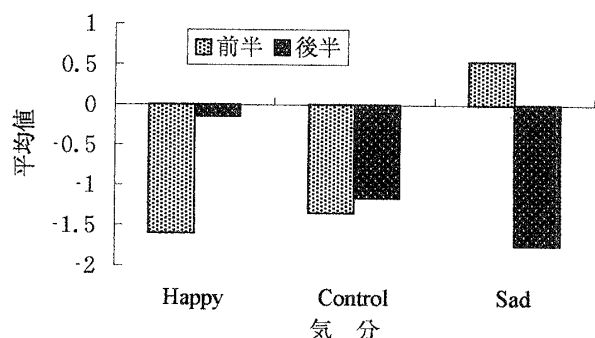


Figure 1 気分ごとの平均ポジティブ得点

者の再生を前半と後半の2つの時点にわけ、それぞれに含まれるポジティブ単語とネガティブ単語の差をポジティブ得点(P得点)とした(Figure 1 参照)。P得点について、気分(3)×性別(2)×再生時点(2)の3要因の分散分析を行った結果、性別と関連する効果は見られなかったため、以後は性別を除いた2要因で分析を進めた。

気分×時点の2要因の分散分析の結果、交互作用のみが有意であった($p<.05$)。下位分析の結果、前半の再生では、Sad群が、Happy群及びControl群よりも有意にポジティブな単語の再生を行うことが示された。後半の再生では、気分による効果は見られなかった。このことから、Sad群では、前半の再生に気分不一致効果が見られ、後半でも気分不一致効果を解消する再生が続けられたと考えられる。

<5番目までの再生についての分析>ポジティブ再生は(+1)、ネガティブ再生は(-1)として、各被験者の5番目までの再生について、2要因の分散分析を行った。その結果、気分×再生順序(5)の交互作用が有意であった($P<.01$)。また、Figure 2を見ると3番目以降に変化がおこったのではないかと推測された。下位分析の結果、4番目では、Sad群及びHappy群はControl群と比較してよりポジティブな再生を行うことが有意に示された($p<.01$)。5番目でも、Happy群はControl群よりもポジティブな再生を行う傾向が示された($p<.10$)。以上の結果より、Sad群では、前半の再生の中でも、最初は強い不一致の影響は示されないが、徐々に強い不一致が示されることが示唆された。Happy群についても、一致効果について、同様のことが示唆された。

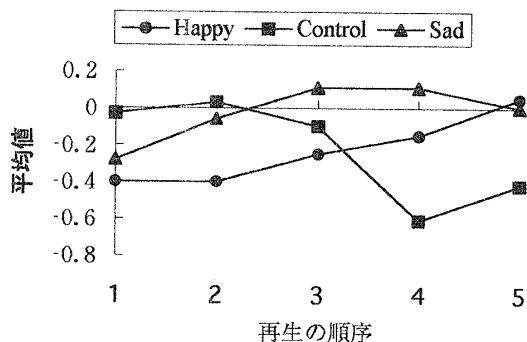


Figure 2 気分ごとの平均得点